

病みし青春はる

山田 崑久枝

上高田一丁目

今日は二月八日、あの思まわしい事があって五〇年が経ちました。目を閉じると、はつきりとあの日の事が思い出されま
す。まるで昨日の様に。

あの日の私は、私達趣味のグループの仲間では亡き一人の
青年を、清瀬の結核療養所に見舞に行つて居りました。もう重
症で起き上がる力も無い状態でした。私は彼を元気づけようと
思つて用意して行つた日本髪用の髷かもしとか、簪かんざしなどをみせながら
「お正月に日本髪結ゆうの。始めてなの。醇じゆんちゃん頑張つて歩け
る様になつてね。そして皆と一緒に写真を撮ろうよね」などと
話して居ました。

その時、日本開戦のニュースのあつた事を知りました。その
夜私は髪を切りました。

趣味の友達の中から学徒動員、又、赤紙で次々に戦地へ行き
ました。又私の職場からも応召されていきました。私の身内か
らも出征していきました。

今別れ 何日いつまた逢はむ 斑雪はだれの 月の光に 青きを見詰む
君に倚よりて 歩めばかたへを 白々と 月光に浮く 鐵路二
すじ

轟沈し 君散華せる 南海の 波濤に降おりよ 星座曼陀羅
(星恋いのグループの仲間、丙種合格の華奢な彼は戦う事な
く散りました)

望遠鏡の 視野に捕えし 淡き星 青く燃ゆるは 誰がみ魂
なる

(昭和二〇年四月十三日、豊島区下落合三丁目で戦災に逢う)
焼け落ちし 書棚あいの間に 読みさしの 随筆ありき 開かれ
しまま

思はず 指を触るれば 一握の 灰となりたり 吾が愛読の
書も

焼跡に 織糸の柄 くつきりと 灰になりても これ吾が衣われ
焦臭と ほてりの熱き 焼跡の 地平に沈む くれなるの星きぬ

(日本では見られない南の星ホームルフアウトか? あつと言う間に昇り、息を呑む間に沈みました)

悲しさも 口惜しさも無し 焼跡は 物のむなしさ のみを囁やく(以上落合にて)

(戦災により中野区天神町へ転居、職場―大学応用化学実験室―にて)

しる粉恋ひ 蔗糖の合成 志ざす 青春^{はる}十八歳の 討論きび

窓際に 丸狩りの頭の 寄り合ふは 紫の君 今通るらし
吾が髪を 醤油となして 煮しめたる 蒟蒻^{こんたやく}うましと 少年^{こちゆう}等

ははしやげる
鯛一匹 そつと食べよと 手にくれし 富雄^{はたち}は二十歳 知ら

ず逝きたり(数学の天才の美少年結核で逝く)

(昭和二〇年八月十五日、陸軍よりの依頼によるアメリカ機
の部分品の分析中緊急招集を受け、大講堂にて終戦の玉音を聞
く)

玉音を 耳に残して 黙々と 米機の部品の 分析いそぐ
実験用の 爐は赤赤と 溶かし居つ 米機の部品を 終戦の
今

(戦後の日日、中野区昭和通り―現在の早稲田通り天神町付
近―にて)

行きずりの ジープ乙女を さらひ去る 気の付かぬごと 人
も吾^あも亦

朝外出^あに 吾は見たりき 昨日まで ゴミ場^{ごみ}漁りし 人の死
にたる

(買い出し)

水戸の駅 乗り換えの間の 我^わが「むすび」 群れて奪ひて
童等^{わらわ}散りぬ

(昭和二〇年職場を去る)

師ゆ受けし 小瓶の「くすり」は 地下深く 四五年 今幸
に生く

平成三年十二月八日記す
現在の幸せに感謝……さりながら……?